

## 《保健体育科》

### 人生を豊かにし、自分の生き方に責任をもつ保健体育学習のあり方 － 探究を通して生まれる「ものがたり」を通して－

石川 敦子 徳永 貴仁

これまでに、「運動・スポーツの本当の面白さは何か?」という包括的な問い合わせのもと、豊かなスポーツライフの実現につなぐ異学年合同学習や運動の苦手な子に焦点を当てた体育学習、そして運動・スポーツに多様なかかわりをする中で運動・スポーツの捉え直しや自己の「ものがたり」の変容を図ってきた。

今期は、現在の社会状況をふまえ、「スポーツがある意味や価値」、そしてその前提として当たり前に捉えられていた「健康」について焦点を当てて研究を進めていく。

本校保健体育科のめざす生徒像を「人生を豊かにし、自分の生き方に責任をもつ生徒」とし、そのためには保健と体育の両面からのアプローチが必要であると考えた。体育分野では「スポーツ文化を自分に取り入れることで人生を豊かにする」こと、保健分野では「健康の重要性を実感し、自分の生き方に責任をもつ」ことを目標とした。

以上のように考えて、研究主題を設定し、次の3点を研究内容として、研究を進めている。

- (1) 保健と体育を関連させた教材の開発
- (2) 教科を学ぶ本質に結びつく自己に引きつけた語りを生むための単元構成の工夫
- (3) 自己の健康・スポーツ観の変容につながる振り返りの工夫



【保健分野での語り合いの様子】

## 《技術・家庭科》

### 持続可能な社会を構築する実践力を育む技術・家庭科教育 － 生活を語り合い、問題解決を実践することで生まれる「ものがたり」を通して－

渡邊 広規 大西 昌代

本校技術・家庭科では、授業での学びは自己の未来の生き方、そして持続可能な社会へつながるものであると考える。そこで自分の生活が持続可能な社会の構築につながっていることを自覚し、自分なりに考えながら生活の問題を解決していくことで、生活をよりよくしたり、自己の生き方を考えたりする主体的な生活実践力を身につけさせたい。

そのために、毎日の生活で当たり前に思ったり、行ったりしていること（学習前の文脈）から題材を構成し、自分の生活の当たり前にずれを生じさせる。そして、自己の生き方を語るだけでなく、教科の特性として、学びを生かして自分の生活にアクションを起こすこと（生活実践力）に変容しているか、そして自分の生活と持続可能な社会にまで視野を広げられているかを見取りたい。

その手立てとして、以下の3つの視点で研究を行い、生徒の生活実践力を育み、自己の生き方へつなげていきたいと考える。

- (1) 生徒の「当たり前」を捉え、より主体的な生活実践力へつながる題材構成と問い合わせ
- (2) ものづくりや改良、修復・修繕、リメイクなどの活動の中で、持続可能な社会の担い手として、語り合い、探究するための場の設定と教師のかかわり方
- (3) ものに込められたこだわりや思いを見つめ直すことで「自己に引きつけた新たな語り」を生むようにするための工夫や手立て



【自分の生活の問題点を考える様子】

## 《外国語科》

### コミュニケーションへの意欲を高める英語授業の創造 —「探究的な学び」から生まれる「ものがたり」を通して—

眞鍋 容子

黒田 健太

これまで英語科では、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成に重点をおいて研究を行ってきた。学習前の生徒の考えを把握した上でコミュニケーションの場面を設定したり、ことばの奥深さや多様性を実感させたりすることで、コミュニケーションへの意欲が高まると考え、実践を重ねた。生徒の振り返りを分析すると、日本と外国、日本語と英語の違いを知ることで、英語学習や異文化理解の必要性を実感している記述は多く見られたものの、その気づきや学びがコミュニケーションへの意欲の向上につながったとは言い難い。

そこで今期は、「探究的な学び」を生み出す言語活動を単元に組み込む。生徒は、言語活動を通して、「伝えたいことをうまく伝えることができない」といった困難や葛藤に出会い、問題を解決しようと既存の知識や経験と結び付けながら仮説を立てる。その仮説を検証する過程において、「英語で伝えることが難しいと思っていた内容が、この英語表現を使うと伝わるんだ」というように、すでにもっていた知識が実際に運用できる知識へと変化していく。同時に、異なる言語を話す相手と気持ちを伝え合う喜びや達成感が生まれ、それによってコミュニケーションへの意欲は一層高まると考えられる。今期は次の3点を柱として、研究を進めていく。

- (1) 「探究的な学び」につながる単元構成の工夫
- (2) 即興で話す力を育む教師の支援の在り方
- (3) 英語でのコミュニケーションに対する新たな「ものがたり」が生まれる語り直しの工夫



【課題解決に向けたやり取りの場面】

## 《学校保健》

### 人間性豊かで心身ともにたくましい子供の育成をめざして —「他者とかかわる力」を育む養護教諭のかかわり～自己肯定感を高めるために—

日本 垣矢

前回の発表会では、養護教諭が行う健康相談活動に、ナラティヴ・アプローチの手法を取り入れた個の支援と、ソーシャルワーカーと連携し、ソーシャルスキルトレーニングを活用した集団による支援を実施し、その効果を検証してきた。今後も、個と集団との支援をリンクさせながら、更なる心の予防的な取り組みを継続していく。

今年度の1年生は、人間関係を構築する、年度当初の2ヶ月間が休校となり、コミュニケーションをつむぐ経験が例年より少ない。そのため、互いを理解し合う体験が少ない分、他者の気持ちを顧みない言動や、SNSも含めた人間関係でのトラブルが多数発生し、傷つき、傷つける場面が見られる。また、本校生徒の多くは、学業に対する心理的なプレッシャーを感じており、現実の自分と理想の自分（なりたい自分）との間を埋められず、自己肯定感が極端に低い生徒も見られる。加えて、自分の気持ちを他者へ伝えることや、他者とのかかわりが不得意な生徒の対応が課題となっている。そこで、今期は1年生を対象に、次の2点を柱として、研究を進めていく。



【ソーシャルスキルトレーニングの様子】

- (1) 「他者とかかわる力」を育むソーシャルスキルトレーニング(SST)の構成と工夫
- (2) ナラティヴ・アプローチの手法を取り入れた生徒同士のかかわりの工夫

## 総合学習シャトル

総合学習シャトル（以下シャトル）のねらいは、教科学習における活用と総合学習CAN（以下CAN）における探究とをつなぐことにある。これまで、シャトルは一般講座（1月と2月）と特設講座（7月）に分けて実施していたが、CANとの接続などに関して次の課題があった。

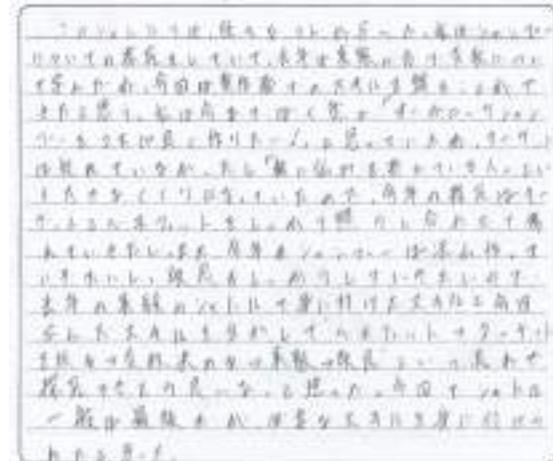
- ・一般講座の内容と特設講座の内容が重なりつつある。
- ・生徒のCANでの探究を考え、探究スキルの精選が必要である。
- ・シャトルでの学びが、CANでの困りの解決になっているのか。
- ・発表を聞く際に、質問する力が身についていない。

このことを踏まえ、従来の特設講座の内容を見直し、CANの始まる前（または初期）に身につける探究スキルと、探究中に必要な探究スキルとに分けて実施するという方向で、令和2年度は、講座内容と全体の枠組みの見直しを図った。「新シャトル」では、前期8講座、後期8講座の全16講座を用意しており、前期、後期でそれぞれ2講座ずつを選択して受講する形をとる。新シャトル前期講座は、令和3年1月下旬から実施している。後期講座は、6月下旬から7月上旬に実施予定である。

従来のシャトル特設講座		新シャトル		
探究スキル	講座名	期	探究スキル	講座名
I 課題設定力	① 発想法 ② インタビュー、取材 ③ アンケート ④ 思考ツール ⑤ 資料収集 ⑥ 情報の分析 ⑦ データの見方・とらえ方 ⑧ 情報の伝え方	前期 講座	I 課題設定力	①発想法 ②困りを発見する力
II 課題追究力	⑨ 文章表現法 ⑩ プрезентーション1 ⑪ プрезентーション2 ⑫ 視覚化 ⑬ グラフの見せ方		II 課題追究力	③電話・メールマナー ④アンケート ⑤ロジカルシンキング ⑥仮説を立てる力
	⑭ リフレクティング ⑮ コミュニケーション ⑯ リーダー養成研修講座		IV チームマネジメント力	⑦コミュニケーション力 ⑧プロジェクトマネジメント
	⑨ 文章表現法 ⑩ プрезентーション1 ⑪ プрезентーション2 ⑫ 視覚化 ⑬ グラフの見せ方		II 課題追究力	⑨質問力 ⑩情報の分析
	⑭ リフレクティング ⑮ コミュニケーション ⑯ リーダー養成研修講座		III 表現力	⑪キャッチコピー ⑫プレゼンテーション1 ⑬プレゼンテーション2 ⑭視覚化 ⑮グラフの見せ方 ⑯動画編集
	⑨ 文章表現法 ⑩ プрезентーション1 ⑪ プрезентーション2 ⑫ 視覚化 ⑬ グラフの見せ方		III 表現力	⑪キャッチコピー ⑫プレゼンテーション1 ⑬プレゼンテーション2 ⑭視覚化 ⑮グラフの見せ方 ⑯動画編集
	⑭ リフレクティング ⑮ コミュニケーション ⑯ リーダー養成研修講座		IV 自己評価力	⑨質問力 ⑩情報の分析
	⑨ 文章表現法 ⑩ プрезентーション1 ⑪ プрезентーション2 ⑫ 視覚化 ⑬ グラフの見せ方		Ⅴ チームマネジメント力	⑪キャッチコピー ⑫プレゼンテーション1 ⑬プレゼンテーション2 ⑭視覚化 ⑮グラフの見せ方 ⑯動画編集
	⑭ リフレクティング ⑮ コミュニケーション ⑯ リーダー養成研修講座		Ⅵ 自己評価力	⑨質問力 ⑩情報の分析

【図1 従来のシャトル特設講座と新シャトルの講座】

実践後には、振り返りを行うが、その方法についても、検討の余地がある。図2のように、CANでの探究と結びつけて記述できることが望ましいが、シャトルを通してできるようになったことのみの記述になっている場合も多い。シャトルでの学習を自分なりに意味づけたり価値づけたりすることができるよう、振り返りの視点を工夫することが、「自己に引きつけた語り」を促すために必要であると考える。



【図2 振り返りシートの記述】